













は し が き

もりである。編集の下手際などからなお不十分なところも少なくないであろうが、将来の文学史研究への一つの礎石となればまことに幸いである。終わりにわれわれの企画に賛同して御協力下さった執筆者各位に心から御礼申し上げる次第である。また出版に当たって労を惜しまず尽力された學燈社に対しても謝意を表したいと思う。

昭和五十三年三月十五日

編者代表 市 古 貞 次



















